

## その 35 旧制広島高校の師弟



「もののふの 八十娘子らが 汲みまがふ 寺井の上の 堅香子の花」

(群れなす乙女たちが汲みさざめく、寺井のほとりのかたかごの花よ) 大伴家持(巻 19・4143)

万葉学者大浜巖比古氏が学生時代、すでに上海に出征していた阿川弘之氏に、堅香子（カタクリ）の花の絵葉書に書いて送った歌である。以来、阿川氏にとって、万葉集中最も思い入れのある歌となった。

これまで、数回にわたり、作家の阿川氏と大浜氏の交友関係について紹介してきたが、ともに 1920 年の生まれで、旧制広島高等学校（以下、広島高校という）で同級となって以来 40 年間、大浜氏が 56 歳で亡くなるまで親友として付き合ってきた。大正 12 年創立の広島高校は、原爆により講堂を残してそのほとんどが倒壊。戦後は、広島大学に包括され、広島大学広島高等学校と改称されたが、昭和 25 年には廃校となり、広島大学教養部の母体となった。その広島高校の同級で親しくしていたはずだが、時に阿川氏は大浜氏を下級の友人という。同級生のはずなのになぜ下級生か？その理由はすぐに分かった。阿川氏は、実話をもとにした短編小説『友をえらばば』(「小説新潮」、昭和 33 年 11 月号) で、大浜氏のことを、次のように紹介している。破天荒で忌憚のない紹介ぶりである。

＜同級生の中でも大人びてみて、酒、博打、女、すべての事で私たちの先覚者であった。(略) 教授の中に麻雀が好きなのがゐて、学期試験の最中に、メンバーが足りないといふので、大浜に誘いが掛かってきた、(略)「先生、僕が麻雀で勝ったら、あした答案を白紙で出しても百点を呉ますか？どうです、賭けようじゃないですか」、というわけで、其の晩 1 人勝ちをし、翌日約束通り英語の答案を白紙で出し、約束通り満点もらった、(略)しかし、どの学課も麻雀で点をかせぐわけには行かなかったから、大浜は結局 2 度落第し、5 年かかって広島高等学校を卒業した＞という。

一応小説の形をとっているのですが、どこまで面白く話を「盛ったか」は分からないが、2 度落第したのは本当のようだ。つまり、同級生だったが、下級生でもあったわけである。そして、大人びていた中で最も「大人びていたのが短歌」だった。その短歌の原点が、万葉集であり、国語の教授で歌人、万葉学者でもあった中島光風先生だった。阿川氏と大浜氏が、万葉集と中島先生に初めて出会った時の思い出を、阿川氏は、「日めくり万葉集」で、昨日のことのように話してくれた。

「万葉集は、旧広島高等学校 1 年の時、第 1 巻から講義を受けました。先生は中島光風というアラギ派の歌人で、先生の講義は、驚くほどフレッシュな感じがして、中学を出たばかりの僕たちの心にしみました。中島先生のお宅に伺っては仲間たちと嘴の黄色い万葉論を戦わせたものです。その時のテキストがこれです」と言って、擦り切れてボロボロになった



2 冊の文庫本を手にとって見せてくれた。澤潟久孝・森本治吉著『作者類別年代順萬葉集』（上下巻、昭和 7 年、新潮社刊）である。阿川氏は、この文庫本や中島先生宅で行われた万葉輪講会と呼んだ勉強会についてはさらに詳しく、とりわけ、中島先生の人柄について親しみと敬意をもってエッセイに書いている。

く二冊で合計一圓四十銭の廉價版だが、軍服を着た私と一緒に臺灣まで行き、中華民國の漢口へも行き、復員船にも一緒に乗って歸って来た仲で、書物とのつき合ひもこの程度古くなると、戀や歌や、青春の憶ひ出、戦争の記憶、いろんなものが濕気と一緒に頁に染みついてゐて、もし私が自分の手持ちの本をすべて處分する気になる時があっても、この萬葉集だけは一寸手放す決心がつかないだらうと思はれる。さういふ本である。

私が広島高等学校の生徒の時、課外の俳句會や短歌會と同じやうな萬葉輪講會が學校に生れた。それは、國語の教授の中島光風先生の萬葉集の講義が非常に面白いので、正規の授業以外にもっと萬葉を勉強したいといふ生徒たちが、中島先生を中心にして作った會であった。

中島先生は、舊制高等學校の最もよき一面を代表するやうな、リベラルな考へを持った、のびのびとした、気持のあたたかな、そして學問的にも立派な先生であったが、輪講會のテキストには、この文庫本が選ばれ、私たちはこのテキストを中島先生の家へ持ち寄って、各自嘴の黄色い勝手な熱をあげ、萬葉集を研究するといふよりは、萬葉の歌を素材にして、私たちの若い夢を育て、楽しんでゐたのであった>（「京都の萬葉學者と私」、昭和 36 年）

そして、學校の授業での面白いエピソードを 1 つ。學校では別の教科書を使っていたようだが、それについては後に触れる。

く私は中学の末年ごろから漠とした文学志望の気持を抱いてゐたが、はっきり文学の道へ進まうと思ひ定めたのは、この広島高等学校時代である。それについて大きな影響を受けた人が、（略）國語の中島光風先生で、一年生の時萬葉集の講義を受けた。古典は、講述してもらふ先生によって、本来の味や香りが失せてしまふやうに思ふが、中島先生の萬葉集は面白かった。開卷第一、雄略天皇の「こもよみこもち」の歌から、先生の選択にしたがって逐次、旅人や家持の歌、東歌、防人の歌まで読み進んだ。

「昔から『畝傍のみほと』と言って、畝傍山はかたちが女陰に似てゐて」と、大和三山の歌の解説で露骨

な（？）話をされることもあったが、わざと生徒を笑はせたり喜ばせたりといふやうな気配は微塵も無く、ちゃんとした学問的な講義でありながら、それが面白かった>（「私の中の日本人—中島光風先生」、昭和 50 年、「波」、5 月号）

中島先生は、陸上競技部の部長もしていたので、<文学青年一派と、陸上の部員たちとが、いずれも「光風さん、光風さん」と言って、先生を慕った。「光風」は雅号に聞えるが、先生の実名である>（同）

中島先生宅で行われた万葉輪講会で「嘴の黄色い万葉論を戦わせた」仲間たちの内、最も歌の才能を発揮したのが大浜氏だった。同級生が下級生になっても、この輪講会や歌会で、2 人は一緒、以来 40 年来の親友となる。文芸部ではともに委員をやって、一緒に歌を詠んだり雑誌を作ったり、中島先生を中心に野山に小旅行を試みたりして、謂わば、若い、「かぎりなき夢」を育てていた。阿川氏は、大浜氏が 18 か 19 歳だった頃、法隆寺のあたりを旅して帰ってきて作った歌を、今も 1 首覚えていた。

「飛ぶ鳥の あすか古国 あかあかと 一瞬にして 太陽の落つ」

それに対して、阿川氏の短歌は、「全然ものにならなかった」として次のように、あるエピソードを書く。

<この友人の影響で、私は「アララギ」の添削会員になった。規定の歌稿用箋に歌をしるして東京の「アララギ」発行所へ送ると、朱を入れたりマルをつけたりして返送してくれる。先達の大浜は、歌人といえば聞えがいいけれども、無茶苦茶な遊び人で、酒、博打、女、すべてに関し、当時の私にとっての英雄であった。

広島に新しいビヤホールが開店し、開店記念の大賑わいの晩、大浜がマントの下にジョッキを 3 つかくし持って出て来た。その英雄的行為に感激した私は、

「巖比古は 開店早々の ビヤホールより ジョッキを 3 つ かつばらひ来ぬ」、という一首を作って「アララギ」に送った。

斎藤茂吉の「鼠の巣片づけながらいふこゑは『ああそれなのにそれなのにねえ』」

ああいう戯れ歌が好きで、真似をしたつもりだったが、返されて来た歌稿には、土屋文明氏じきじきの朱筆で、「かかるものが歌になると思い給うや」と書いてあった。

それ以来自信喪失、あまり歌を作らなくなったが、大浜は初志を貫徹したというべきか、澤潟(おもだか)久孝先生の門に入って萬葉学者になった>（『論語知らずの論語読み』、昭和 52 年、講談社刊）

苦手な短歌に代わって、阿川氏は、小説の道を進むことになる。

<2 年生の時、私は論文を 1 つ、小説を 1 つ、先生に見てもらった。他にも眼を通して頂いたものがあるかも知れないが、忘れた。題名を記すのも気がひけるしろものだが、小説は文芸部雑誌のコンクールに応募した「瀬戸」といふ大甘の恋愛小説、論文の方は、万葉輪講会のレポート「高橋虫麻呂論」であった。虫麻呂論については何と評されたか、要するに讃められた記憶が無いが、「瀬戸」は割にいい点を得た。（略）

万葉集の好きな先生が、どの程度水準を落して私の恋愛小説を評価されたのかは分らないが、私の卒

業の前後、下の級の大浜巖比古に、「阿川君が東京へ行って小説を書くから、君は京都へ行って万葉をやったらどうか」と、すすめられたさうだ。

当時のことで、生徒の「身のため」を思へば、小説家を志すのなどまあやめておき給へといふのが、常識的なところであらうし、家兄の友人で実際家兄を通じてさう忠告してくれた歴史の教授もあったが、光風先生は私が小説創作の道へ進むのに反対されなかったし、どちらかといへば支持して下さった。

私の中に才能の切れっぱしのやうなものでも認め、それを伸ばしてやりたいと思はれたのだらうかと、ありがたい気がしてゐる。もっとも、私の亡母などは、のちのちまで、「あの子が文学なんぞやるやうになったのは、みな、中島先生のおかげや」と、人に恨み言を言ってみた（「私の中の日本人」）

阿川氏は、大浜氏が、中島先生の言葉を受けて、「自分は、先生の万葉集研究の後を継ぐ」と言っているのを聞いたという。大浜氏は、中島万葉学をどのように継ごうとしたのか。その後の大浜著『万葉幻視考』につながるような手がかりが、そして、その原点がどこにあるのか？ それを探る方策がないだろうか？ そして、その糸口になるかもしれない、少なくとも中島万葉学とはなにかを知る絶好の材料があったのである。それを次回に紹介することにするが、不肖「大浜先生の孫弟子」を自称する私事で言えば、中島氏は、3代前の私の師ということもできよう。学生たちは、親しく「光風さん、光風さん」と呼んでいたように、以後は、中島氏については、「光風先生」と呼ばせてもらうことにする。

かくして、阿川氏は、昭和15年、東京帝国大学文学部国文科に入学、大浜氏は、2度の落第で2年遅れて、昭和17年、京都帝国大学に一発で合格して文学部国文科に進学した。当時の文学部国文科の教授は、澤瀉久孝氏。あの光風先生の万葉輪講会で使ったテキスト『作者類別年代順萬葉集』の著者である。『万葉集』一筋に費やした萬葉学研究の大家で、代表作は『萬葉集注釈』。1951年、萬葉学会が設立された際、その代表者に推されている。教え子には、『萬葉集』（全10巻、集英社刊）を註釈したことで知られる伊藤博、それに、大浜氏と『雲の墓標』の吉井巖氏が加わることになる。

阿川氏は、東大に行ってから、帰省の度に、楽しみにして光風先生を訪ねた。大浜氏が晴れて京大に入学した昭和17年、阿川氏は、繰り上げで大学を卒業し海軍に入隊。それから先生とは互いに繁々と便りのやり取りをしている。そして、昭和19年、上海に赴任することになり、その途次先生を訪ねている。

<19年の夏、戦地へ赴任する途中、郷里で一泊し、先生に別れを告げに行った。任地は上海で、私はそれほど悲壮な気持ではなかったが、任地のことを先生に話すことは出来なかったと思ふ。

先生はあはれんでゐるのでもない、私の白い海軍中尉の軍服に感心してゐるのでもない、一種照れたやうな複雑な表情をして、町角まで送って来て下さった。それが、光風先生を見た最後になった（同）

「出で征きし 教へ子どもの 誰彼れが 心に乗りて 朝に夕なに」

それが「最後になった」光風先生の歌碑が、広島中央公園にあるが、それについてはまた後に記す。

